

テーブルの向こう側から 補足資料 ～Vol.25～

2017年7月発行

TABLE FOR TWO(TFT) プログラムをご担当くださっている皆さまへ

日頃からTFTプログラム実施のため、多大なるご支援を頂戴しまして誠にありがとうございます。

TFTの活動は日本でのヘルシーな食生活の推進と、支援先での学校給食の提供が両輪になっています。ニュースレター「テーブルの向こう側から」では、支援先の様子と日本国内のTFTプログラムご参加団体のユニークなお取り組みについてお伝えしています。

食堂をご利用される皆さまに親しんでいただけるよう、改良を重ねてまいりたいと考えております。皆様からのご意見やご感想をお聞かせいただけますと幸いです。

タンザニアのザンジバル諸島での給食プログラム

タンザニアのザンジバル諸島では、特に貧困家庭が多い2つの地域の小学校9校で学校給食を提供しています。給食の提供が始まってから、生徒数が1.5倍に増えた学校もあり、出席率も成績も向上しています。また、給食に使う食材は地元農家と契約をして買い取っており、貧困家庭の収入の向上・安定にもつながっています。

この補足資料では、ザンジバル諸島での生活の様子に加えて、生徒や地元農家の声をお届けします。

日本国内での活動状況のお知らせ

＜これまでに寄せられたご寄付＞ ＊TFT事務局に入金された寄付金額ベースで食数に換算

累計 5,111万258食分（2017年5月時点）

東アフリカとアジアの6カ国（ウガンダ、エチオピア、ケニア、タンザニア、ルワンダ、フィリピン）で学校給食の提供と菜園・農業支援を推進しています。

＜世界食料デー「おにぎりアクション」が日本マーケティング大賞 奨励賞を受賞＞

10月16日の世界食料デーを記念して10/11～11/30に実施した「おにぎりアクション2016」が**第9回 日本マーケティング大賞の奨励賞を受賞**しました。おにぎりの写真1投稿につき、アフリカ・アジアの子どもたちに給食5食を届けることができる「おにぎりアクション」には**10万8,815枚ものおにぎり写真**が寄せられ、**約4,000人の子とも**に**1年間分の給食**を届けることができた取り組みをご評価いただきました。様々なかたちでご支援、ご参加くださった皆さまに、あらためて心より御礼申し上げます。

Facebookページで情報発信中



www.facebook.com/tft.jp/

ザンジバル諸島はタンザニアの最大都市ダルエスサラームから100kmほど離れた場所に位置します。ウングジャ島とペンバ島という二つの主要な島と、周辺の島々から構成されており、沖縄県と同じくらいの面積に約130万人が住んでいます。

16世紀にポルトガルによって征服された後、18世紀にはオマーン出身のアラブ人が支配することになり、現在でも英語とスワヒリ語に加えてアラビア語が公用語として使われています。

独立をめぐる歴史的な経緯から、ザンジバルには広範な自治権が認められています。義務教育についてもタンザニア本土とは異なったカリキュラムが採用されています。義務教育終了時の全国統一試験では、ザンジバルの生徒のほうがタンザニア本土の生徒よりも平均点が低い状況が続いています。



ビーチリゾート以外は零細漁師や農家が暮らす島

ザンジバル諸島は、ビーチとサンゴ礁に囲まれた美しい自然、そしてアフリカ、アラブ、ヨーロッパの文化が交わった独特の雰囲気を目当てに、欧州などから毎年数十万人が訪れるリゾート地です。

観光の中心となるストーン・タウンはヨーロッパとアラブの双方から影響を受けた独特の街並みを残しており、世界遺産に認定されています。



観光地として知られるザンジバル諸島ですが、中心地を離れると道路は未舗装になり、民家の造りも簡素になり、靴を履かずに裸足で歩く子どもたちの姿が目につくようになります。

政府機関に勤める役人や観光業の従事者以外は、零細漁師や農家など、現金収入の手段をもたない世帯が大半です。

1週間のうち、ソルガム（もろこし）とササゲ豆のお粥が3回、オレンジサツマイモと野菜、果物をあわせたメニューが2回提供されています。野菜や果物の購入費用の一部は地域住民から拠出されています。



© Junko Kaisato

給食の時間になると子どもたちは食器を持って校庭に並び、配膳を待ちます。教室や木の下など好きな場所で食べる給食の時間は、多くの子ども達にとって最も楽しい時間です。



© Junko Kaisato



零細農家の技術向上と現金収入につながる給食プログラム



© Junko Kaisato

ザンジバル諸島では地元の農家が栽培した野菜を買い取り、給食の食材にするという取り組みを行っています。5～6人の農家で構成されるグループを作り、オレンジサツマイモやササゲ豆、ソルガム（もろこし）など事前に指定した作物を栽培してもらい、収穫後に買い取ります。プログラムに参加する農家にはザンジバル農務省が農業指導を行い、収穫量の底上げをはかっています。

現金収入が増えた農家からは感謝の声があがっています。

「現金収入が増えたので牛を買った。これから繁殖させて子牛を販売し、さらに現金収入を増やしていきたい（Haji Hamariさん）」

「以前は茅葺きの屋根で雨漏りがひどかったが、このプログラムのおかげで現金収入が増え、トタン屋根にすることができた（John Sleimanさん）」



© Junko Kaisato

バハティ（Bahati）さん（写真左）には学校に通う子どもが3人います。

「1年生、2年生、9年生の子どもがいます。小さな畑でキャッサバ、野菜、米などを育てています。家で朝食を食べさせてあげられないので、学校で給食を食べて元気に帰ってきてくれるのがとても嬉しい」と話しています。

2年生と3年生の子どもをもつサダム（Sadam）さんも給食を喜んでいる一人です。

「以前は子どもがお腹をすかせて学校から帰ってきて、家で食べ物を探し回っていたが、給食が始まってからはそういったことがなくなった。

3年生の子は将来は医者になりたいと言っている。私自身が病気になってもお金がなくて病院に行くことができないので、しっかり勉強して目標を叶えて、今よりも良い生活を送れるようになってほしい」と話してくれました。

TABLE FOR TWOスタッフより

今回の視察は、子どもたちの両親や契約農家へのインタビューを多く行いました。ザンジバルは栄えている観光地というイメージが強い場所ですが、中心部から少し離れると、他国の貧困地域と変わらない風景が広がっています。住民は漁師や農家がほとんどで、現金収入が少なく、食べ物を確保するのが大変と語る母親が非常に多かったです。

契約農家の皆さんからは、本プログラムを通じ現金収入が増えたお陰で、子どもを病院に連れて行くことができるようになった、との声も多く寄せられました。

子どもたちの栄養状態の改善、教育機会の提供に加え、地域の人々の生活状況の改善にもつながる本プログラムは、今後他の地域でも展開していけたらと考えています。

（TABLE FOR TWO事務局長 安東）



© Junko Kaisato